

大衆の時代と肉体的愛の逆説―

イエイツの「少女と若者の7つの歌」を読む

加藤英治

The Winding Stair and Other Poems (1933) において、クレージー・ジェーン詩篇につづく少女と若者の7つの歌は、肉体的な情熱を低俗な感情と見なしている少女に、むしろ肉体的な情熱こそ永遠なる精神的愛への通路を開くのだと切迫した感情を抱きながら説く若者のすがたを描いている。すなわちクレージー・ジェーン詩篇におけるクレージー・ジェーンの思想を若者に引き継がせ、司祭の思想を少女に引き継がせながら、攻守のポジションを交代させているといえるだろう（加藤60-70頁）。以下、少女と若者の歌のやりとりによる思想的攻防を見ていくことにしよう。

まず“Girl’s Song”について。

I went out alone
To sing a song or two,
My fancy on a man,
And you know who.

Another came in sight
That on a stick relied
To hold himself upright;
I sat and cried.

And that was all my song —
When everything is told,
Saw I an old man young
Or young man old? (Yeats, “Girl’s Song” 1-12)

少女は、ある男のことを思い浮かべながら、1、2曲歌を歌っていたのだが、そんな少女の前に姿を現したのは、思いがけない、杖をついた男で、驚きのあまり、歌はそこで終わってしまい、少女には疑問が残る。すなわち、自分が見たのは若者の心をもつ老人だったのか、それとも、老人の心をもつ若者だったのか。この歌は民話形式の哲学とでもいべきもので、心の生と肉体の生との関係についての根源的な問いを私たちに投げかけている。

次に“Young Man’s Song”について。

‘She will change,’ I cried,
‘Into a withered crone.’
The heart in my side,
That so still had lain,
In noble rage replied
And beat upon the bone:

'Uplift those eyes and throw
Those glances unafraid:
She would as bravely show
Did all the fabric fade;
No withered crone I saw
Before the world was made.'

Abashed by that report,
For the heart cannot lie,
I knelt in the dirt.
And all shall bend the knee
To my offended heart
Until it pardon me. (Yeats, "Young Man's Song" 1-18)

この歌の内容は、若者とその心との対話である。自問自答といってもよいが、若者は自分自身の中に異質の他者を抱えており、それが心なのである。少女もいつか皺だらけの老婆になるという、いわば「肉体的自我」の立場からの若者の発言は、心に「高貴な怒り」を引き起こす。心は、天地が創造される以前には、皺だらけの老婆など存在しなかったという。すなわち、心にとって、永遠の若さを保つ魂こそが実在であって、肉体的存在は仮象でしかないのだ。若者は心は嘘をつかないというが、実際は、心はあちこちで矛盾したことをいい、自家撞着を起している。それでもなお、嘘をついていないのだとすれば、真理の基準をいかなる外的権威にも求めず、現実との照応さえ無視して、ひたすら主観性の強度に求めるプロテスタンチズム的思想が前提になっているのだろう。

次に“Her Anxiety”について。

Earth in beauty dressed
Awaits returning spring.
All true love must die,
Alter at the best
Into some lesser thing.
Prove that I lie.

Such body lovers have,
Such exacting breath,
That they touch or sigh.
Every touch they give,
Love is nearer death.
Prove that I lie. (Yeats, "Her Anxiety" 1-12)

この歌における少女の不安とは、万象は「生成-消滅」の過程の内にあり、冬から春への自然の「生成」のように、現に若者と少女との間に芽生えつつある真の愛も、結局いずれ消滅するか、低俗な感情へ変質せざるをえないのではないか、あるいは、恋人たちの肉体的な情熱の高まりがかえって愛の消滅を引き寄せるのではないか、という不安である。リフレインの「私が嘘をついていることを証明して」という若者への懇願は、真の愛の永遠性を信じさせてと訴えているのだろう。

少女のいう真の愛は、精神的な愛を意味しよう。そして少女は肉体的な情熱を低俗な感情と見な

しているのだろう。このような少女の思想は、クレージー・ジェーンの思想の対極に位置しているといっ
てよい。クレージー・ジェーンは、肉体的な情熱は肉体ばかりでなく、心も結びつけると考えていたの
だった（加藤67頁）。

次に“His Confidence”について。

Undying love to buy
I wrote upon
The corners of this eye
All wrongs done.
What payment were enough
For undying love?

I broke my heart in two
So hard I struck.
What matter? for I know
That out of rock,
Out of a desolate source,
Love leaps upon its course. (Yeats, “His Confidence” 1-12)

第1連で、若者は、永遠の愛を「購入する」ために、加えられるすべての虐待を目尻に書いた、とい
う。そして、永遠の愛のためには、どのような代償を払えば足りるのだろう、と問う。前半部にアンテ
レッカーは「皺」のイメージを読む（Unterecker 230）。一方、オルブライトは「涙」のイメージを読み、
さらに「約束手形」のイメージを読む（Albright 736）。商取引のメタファーの反復的使用を考慮すれば、
オルブライトの読みは、けっして強引なものとはいえない。

問題は、「加えられるすべての虐待」とは何を意味するのかということである。私は、これを「心に」
加えられたすべての虐待と読み、結局、「心が肉体を与えられてこの地上に生まれてきたことに由来する
すべての苦悩」を意味すると考えたい。「涙」で「約束手形」を書く、とは、肉体的存在としての苦悩を
引き受け続けることへの誓約と解することができる。この解釈は、第2連における「岩」のメタファーの
意味、“Her Anxiety”の第2連における肉体への言及、そして、“Love’s Loneliness”の第9-10行、“What
did we remember/Under the ragged thorn?”の解釈と関連づけられるはずである。

第2連では、若者は、肉体的存在であることによって心が背負う苦悩をものともしないという。その
理由は、「岩」から、「枯渇した源」から、すなわち、肉体から、愛がほとぼしり出るといふ確信を抱い
ているからである。

次に“Love’s Loneliness”について。

Old fathers, great-grandfathers,
Rise as kindred should.
If ever lover’s loneliness
Came where you stood,
Pray that Heaven protect us
That protect your blood.

The mountain throws a shadow,
Thin is the moon’s horn;

What did we remember
Under the ragged thorn?
Dread has followed longing,
And our hearts are torn. (Yeats, "Love's Loneliness" 1-12)

この歌の始まりは、イエイツの詩の読者ならおなじみの父祖への呼びかけである。若者は父祖に、もし愛するものの孤独があなたがたにもわかるのなら、あなたがたの血を守っている私たちを守ってくれるよう、神に祈って欲しいという。歌のタイトルは、「愛されるものの孤独」と解することができるから、結局、若者も少女も両者ともに孤独だということになる。この歌の第1連に流れる「プロテスタント・アセンダンシー」、すなわち共和国成立以前のアイルランドのアングロ・アイリッシュ（アイルランド生れのイギリス人）の支配階級の子孫としての濃密な心情を踏まえれば、この孤独とは、すでにあの世に場所を移しているアングロ・アイリッシュの理想的な共同体から切り離されているばかりでなく、最後の拠り所ともいべき若者と少女の2人だけの共同体も、存立の危機にあるということではないか。

第2連の「山」、「三日月」、「刺だらけの茨」とは、心を孤立させ、疎外する肉体、そして、外界のメタファーと解することができる。心は肉体を付与され、この地上に生まれてくる以前、あの世で父祖たちとともにあったにちがいない。そして、この世に生まれてきたとき、心には誕生以前の記憶があったのだ。その記憶の痕跡が憧れという感情なのだろう。しかし、それもすでに恐れに代ってしまっている。これは「私たちはどこからきて、どこへいくのだろうか」という漂流の意識、「寄る辺のなさ」という意識である。

次に“Her Dream”について。

I dreamed as in my bed I lay,
All night's fathomless wisdom come,
That I had shorn my locks away
And laid them on Love's lettered tomb:
But something bore them out of sight
In a great tumult of the air,
And after nailed upon the night
Berenice's burning hair. (Yeats, "Her Dream" 1-8)

この歌は、少女がベッドで横になりながら、夢を見たというもので、その夢は、哀悼の意を示すために髪を切り、恋人が眠る墓の上にそれを置いたところ、その髪が風に乗って夜空に舞い上がり、燃え上がる「髪の毛座」(Berenice's hair)に変容したというものである(“hair”)。「髪の毛座」については、OEDにつきのような解説がある。

Berenice, name of the wife of Ptolemy Euergetes, king of Egypt, c. 248 B. C., whose hair, vowed to Venus, was said to have been stolen from the temple of the goddess, and afterwards taken to heaven and placed in a constellation. (“Berenice's hair”)

ビーナスは「精神的愛」の象徴と考えられるから、この夢の意味は、「肉体的愛」は(死とともに)はかなく終るものだとしても、(それが生み出す)「精神的愛」は永遠に燃え続けるものなのだ、ということではないか(“Venus”)。

次に“His Bargain”について。

Who talks of Plato's spindle;
 What set it whirling round?
 Eternity may dwindle,
 Time is unwound,
 Dan and Jerry Lout
 Change their loves about.

However they may take it,
 Before the thread began
 I made, and may not break it
 When the last thread has run,
 A bargain with that hair
 And all the windings there. (Yeats, "His Bargain" 1-12)

この歌の第1連で、若者は「プラトンの糸巻」について耳にし、何がそれを回転させているのだろうと思う。「プラトンの糸巻」は、プラトンの『国家』第10巻の、宇宙の回転の中心軸をなす「必然性の糸巻」への言及であろう (Faulkner 85)。時の糸が解かれるとともに、永遠性は失われていき、無が支配するようになる。大衆的人間たちの放縦な乱交は無の支配の一つの現れである。

第2連では、そのような大衆的人間たちの生きかたにたいして、若者は孤立の道を選ぶ。若者は、あの髪、すなわち髪の毛座と契約を結んだのだ。すなわち若者は、永遠の愛を信じる道を選ぶのである。

最終行“And all the windings there”は、“the essential complexity of life”(Faulkner 85)の意と解されるが、これを含めて、最後の2行は、「あの髪、そしてすべての生の迷宮(精神と肉体との複雑な絡み合いから成る人間的生)との契約」と解すべきか、それとも、最終行を独立させて、「生の迷宮が存在する」と解すべきか。

私は、最終行を独立させるためには、前行の最後にコンマが欲しいと思う。また、「あの髪ばかりでなく、すべての生の迷宮との契約」と読むほうが、漸進的な意味のリズムが生まれ、美的ではないだろうか。最終行を独立させる読みは、すくなくとも私には、前行との断層が美しく感じられない。

いずれにしても、少女と若者の歌によるやりとりは、生の迷宮の肯定という場所にたどり着いたわけである。すなわち若者は、有限性のゆえに肉体的愛を否定するのではなく、むしろ有限な肉体的愛への沈潜という捨て身の戦略を通してこそ、永遠なる精神的愛への通路が開かれると考えるのだ。

引証資料

Albright, Daniel, ed. *W. B. Yeats: The Poems*. London: Dent, 1990.

“Berenice's hair.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. CD-ROM. Oxford:

Oxford UP, 1992.

Dictionary of Symbols and Imagery. Ed. Ad de Vries. Amsterdam: North-Holland, 1974.

Faulkner, Peter. *Yeats*. Milton Keynes: Open UP, 1987.

“hair.” *Dictionary of Symbols and Imagery*.

Unterecker, John. *A Guide to W. B. Yeats*. London: Thames, 1959.

“Venus.” *Dictionary of Symbols and Imagery*.

Yeats, W. B. “Girl's Song.” Albright 311.

- . "Her Anxiety." Albright 312.
- . "Her Dream." Albright 313-14.
- . "His Bargain." Albright 314.
- . "His Confidence." Albright 312-13.
- . "Love's Loneliness." Albright 313.
- . "Young Man's Song." Albright 311-12.

加藤英治。「イエイツのクレージー・ジェーン詩篇を読む—仮面と抒情」。『異文化の諸相』。日本英語文化学会編。東京：朝日出版社、1999年。60-70頁

(本学助教授)